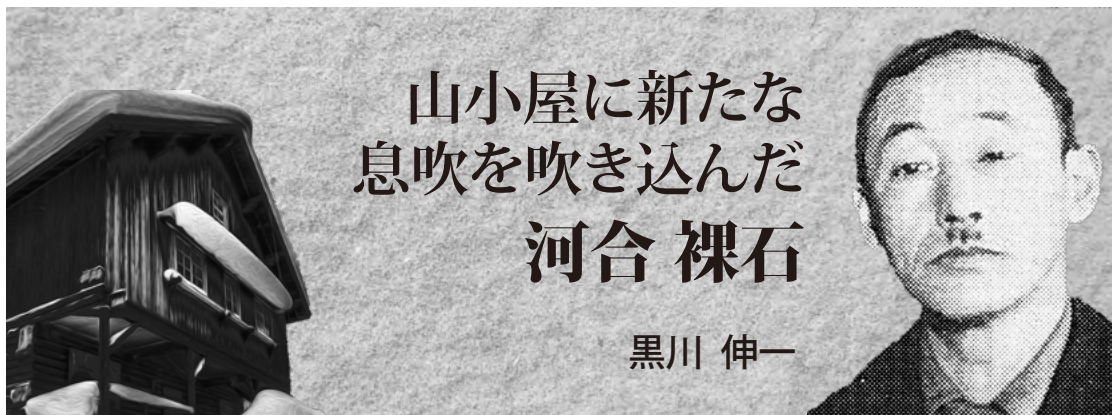




山小屋に新たな 息吹を吹き込んだ 河合 裸石

黒川 伸一



札幌西部の1000～1500
材の山の山中や山麓に、スキーツ
アーを行うための山小屋がピーク時
には25棟程度あった。大正末期から
昭和にかけて、札幌・定山溪温泉を
核に小屋を鎖状に配置する「小屋の
鎖（ヒュッテン・ケツテ）」構想に沿っ
て建設された山小屋群として知られ
ている。大都市近郊の一つの山域に
こうしたスキー小屋が集中的に建設
されたのは、世界でも類例が見当た
らない。この構想に沿ったスキー小
屋づくりに共鳴し、熱い思いを傾注
し、小屋を使ったスキー大会開催な
どを経て、スキー振興への思いから、
理想を散りばめた小屋建設も実現、
小屋を使って多様な利用に取り組ん
だ人物がいる。その完成形とも言え
た東海大学の銀嶺荘（写真①）が

2023年6月、解体されたのを
機に、この人物と山小屋を巡る物語
をまとめた。

代用教員から新聞記者へ

お話の主人公は、明治昭和に活
躍した文筆家であり、新聞記者であ
り、札幌スキー連盟草創期の幹部で
もあつた多彩・多能な人物、河合裸
石（1883～1941年・写真②）
である。

裸石は新潟県三島郡寺泊町（現在
は長岡市の一部）生まれで、本名・
七郎。兄3人姉3人の7番目だった
ことからこの名がつけられた。誕生
当時、虚弱体質で、母親が地元（地
蔵尊「裸石地蔵」に通ったため、後年、
この名を名乗ることになる。3歳当
時、豪商だった実家が経営難に陥り、

両親やきょうだい
ともども、親戚を
頼って一家で新天
地・北海道を目
指して、岩見沢に
移住。長兄が小樽
で味噌・醤油の間
屋業を営むようにな
り軌道に乗って
生活が安定したた
め、裸石は兄に引
き取られて小樽で
幼少時代を過ごし、

『水滸伝』を読みふけるなど文学少
年として過ごした。学校を卒業して
しばらく兄の仕事を手伝った後に上
京して、東京で英語、簿記などを身
に付けたという。

1905年（明治38年）に北海
道に戻った裸石は、現在の石狩市厚
田区の厚田尋常高等小学校に代用教
員として赴任し、8年間を厚田で
過ごした。厚田在任中には、当時ニ
シン景気に沸いていた厚田周辺、特
に景勝地・ルーラン海岸や内陸地の
濃屋山道周辺をくまなく探索し、河
合裸石のペンネームで小説的紀行
集『ルーラン』（小樽・近江堂から
1912年刊）を刊行した。14年（大
正3年）から4年間、小樽新聞社
の記者を務めた後、19年（大正8年）
に北海タイムス社に転じて、同年12
月には社会部長に就任。コラム「熊
の目」欄を設けるなど紙面刷新に力
を注いだ。

取材のために航空機導入を進めた
ことで27年（昭和2年）には事業
部長を兼任、35年（昭和10年）には
事業部長専任となったが、41年（昭
和16年）3月、胃がんのため現職の
まま57歳で死去し、北海タイムス社
としての社葬が営まれた。

裸石は、新聞社勤めになってから
も、旺盛な執筆・著書刊行に取り組
み、『熊の囁』『江差松前追分節』『手

宮の古代文字』『アイヌの炉辺物語』
『蝦夷地は歌ふ』などの書籍を刊行
している。

スキーの先達者として

日本国内でのスキー術のスター
ト、つまり伝来は、旧オーストリ
ア・ハンガリー帝国の軍人、テオド
ル・フォン・レルヒ（1869～
1945年）が、1911年（明
治44年）1～3月に新潟県高田
町（現在の上越市）で旧日本陸軍第
十三師団の将校ら14人と民間人ら
33人に対して、さらに翌12年（明
治45年）2～3月には北海道の旭
川町（現旭川市）で旧陸軍第七師団

の将校と有志33人に対して、スキー
講習を行ったことが起点となり、新
潟と北海道から全国に広がったとい
う歴史がある。

しかし、このスキー術伝来の18年
前の1893年（明治26年）ごろ、
当時、小樽で10歳だった裸石は、ロ
シア・カムチャッカに出稼ぎに出てい
た近所の漁民からシトースト（幅
5寸Ⅵ約15寸、長さ5尺Ⅵ約1
5尺の板の裏にアザラシの皮を張った
原始的なロシア式スキー）を土産に
もらって遊んでいたという。

裸石には、こうしたスキーの原体
験があつたわけだが、厚田で代用教
員、小樽と札幌で新聞記者として働



河合裸石
空沼小屋の前で
1935年頃

②

いていた大正昭和
和初期は、レルヒ
の旭川でのスキー
講習会がきっかけ
で設立された北
大スキー部の活躍
と、同スキー部
が核になって設立
された全日本ス
キー連盟などを介
して、スキーが一
般大衆の余暇とし
て急速に普及して
いった時代であつた。

このスキーの普及は、スキーの原
体験を持っていた裸石自身にも強く
影響を与えたことは容易に想像され
る。日本国内のスキー草創期を支え
た北大スキー部員と卒業生、教員ら
とも数多くの接点を持ちながら、裸
石が道内各地の山々でスキーに興じ
たことは、昭和初期の北海タイムス
紙面や著書『蝦夷地は歌ふ』からう
かがえる。

1927年（昭和2年）12月
28年（昭和3年）1月の「ニセコ
の峰下へ あゝ頃の思ひ出」（4回連
載）、28年1月の「奥手稲の理想郷
へ スキーヤーにのみ恵まれた壮麗
な冬の山」（3回連載）、29年（昭和
4年）の「手稲山スキー行」（3回
連載）などの北海タイムス紙面から



1928年建設の中山ヒュッテ
今は痕跡すらない

③

は、北大スキー部の学生たち以上に、
足しげく札幌西部の山やニセコ方面
の山に相当な回数、スキー登山に
入つていたことが分かる。

スキーのための山小屋

ちょうどその当時、札幌では、
1924年（大正13年）に欧州留
学を経て北大医学部に赴任した大野
精七がスキー部長に就任して以降、
定山溪温泉を核にスキーツアーのた
めの山小屋を鎖状につなぎ、札幌
鉄道局と定山溪鉄道の鉄道も生かす
「山小屋の鎖（ヒュッテン・ケツテ）」
構想が具体化していった時代だった。

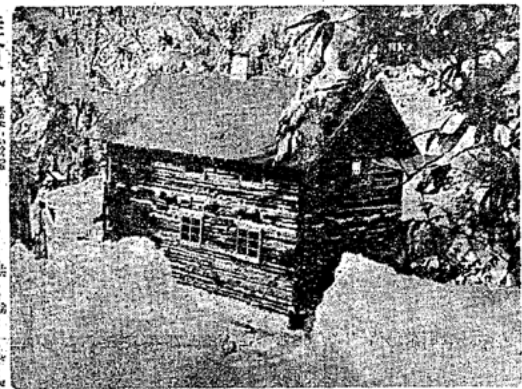
大野に加え、スイスへの留学経
験がある北大医学部教授の山崎
春雄、北大予科のドイツ語教師
だったスイス人アーノルド・グ

中山峠のヒュッテ

愈々竣工して

スキー家の来訪を待てる

中山峠のヒュッテは、定山溪を中心として、大規模なスキー場を造成するに際し、重要な施設として、既に竣工し、スキー家の来訪を待てる。このヒュッテは、中山峠の山頂にあり、眺望が非常に美しい。また、スキーの練習場としても、非常に適している。このヒュッテは、定山溪を中心として、大規模なスキー場を造成するに際し、重要な施設として、既に竣工し、スキー家の来訪を待てる。



中山峠のヒュッテは、定山溪を中心として、大規模なスキー場を造成するに際し、重要な施設として、既に竣工し、スキー家の来訪を待てる。このヒュッテは、中山峠の山頂にあり、眺望が非常に美しい。また、スキーの練習場としても、非常に適している。このヒュッテは、定山溪を中心として、大規模なスキー場を造成するに際し、重要な施設として、既に竣工し、スキー家の来訪を待てる。

▲④中山ヒュッテ完成時の記事 = 北海タイムス 1928 年 11 月 18 日付

山岳スキーヤーに 恵まれたヒュッテ

定山溪を中心として大規模な
六箇全部完成さる



▲⑤札幌西部の山に 6 つの山小屋が完成したことを報じる記事
= 北海タイムス 1929 年元旦付

山岳スキー行 中山峠ヒュッテ訪問

主催 北海タイムス社
後援 北海道山岳會

スキーのシーズンに際し、中山峠のヒュッテを訪ね、その設備と眺望を調査する。中山峠のヒュッテは、定山溪を中心として、大規模なスキー場を造成するに際し、重要な施設として、既に竣工し、スキー家の来訪を待てる。このヒュッテは、中山峠の山頂にあり、眺望が非常に美しい。また、スキーの練習場としても、非常に適している。このヒュッテは、定山溪を中心として、大規模なスキー場を造成するに際し、重要な施設として、既に竣工し、スキー家の来訪を待てる。



▲⑦中山ヒュッテ開きと山岳スキー大会を報じる
記事 = 北海タイムス 1929 年 3 月 26 日付

▲⑥中山ヒュッテ開きを兼ねた山岳スキー大会の参加者
募集の社告 = 北海タイムス 1929 年 3 月 14 日付

ラー、当時札幌に住んでいたスイス人建築家マックス・ヒンデルらスイス人脈が意気投合して 26 年（大正 15 年）、手稲山にヒンデルが設計したスキー仕様の国内初のスイス式山小屋、手稲パラダイスヒュッテを建設したことがその嚆矢となり、翌 27 年（昭和 2 年）、朝里岳南に同じくヒンデル設計のヘルヴェチアヒュッテが建設された。そして 28 年（昭和 3 年）2 月、昭和天皇の弟、秩父宮が来道し、手稲パラダイスヒュッテとヘルヴェチアヒュッテに泊まって、「僕も一つ造るから場所を見つけて設計してほしい」と話したことで、「山小屋の鎖」構想が一気に加速した感がある。

この年の 11 月、道の官製組織である北海道山岳會が中山峠近くに、秩父宮からの御下賜金を元に中山ヒュッテを建設した（写真③④）。ほぼ前後して、空沼岳北の平坦地に、秩父宮の意向に沿って同じく宮家の資金で空沼小屋（宮様ヒュッテ、秩父宮ヒュッテ・写真⑤）を、さらに朝里岳北西の沢治いに小樽スキー倶楽部が朝里岳ヒュッテを建設し、一気にスキー小屋が 5 つに増えた。

北海タイムスの 29 年（昭和 4 年）元旦の紙面では、この 5 つのスキー小屋に、同じ時期に完成した豊平川本流沿いの帝室林野局の造林小屋の二股小屋を加えて、「定山溪を中心

として大理想郷に 六箇全部完成さる」の見出しを付けて、スキーヤーにとつての福音であることを報じている（写真⑥）。この紙面に、当時社会部長だった裸石が関わっていることは間違いないだろう。

この 6 つの山小屋の中で、中山ヒュッテは収容規模が 40 人規模と大きく、北大スキー部関連の小屋ではなく裸石自身が幹事を務めていた北海道山岳會の小屋であったため、使い勝手が良かったのだろう。完成から 5 カ月後の 29 年 3 月に裸石は、北海タイムスの社会部長であり事業部長という立場を生かし、同社の主催事業として、中山ヒュッテの開場式を兼ねた、喜茂別側からの「山岳スキー行」を企画（写真⑦⑧）。札幌から鉄道で喜茂別入りした 66 人が参加して、大々的に実施された。北海タイムス紙面には、ヒュッテの開場式、スキーツアーの模様の単発ニュースなど、3 回の連載記事が掲載された。

裸石自身はコラム「熊の目」で「ヒュッテ中の盟主たるの観がある」「ヒュッテは開かれた 行け行けスキーヤー」と書いた。

この年 12 月の北海タイムス紙面で裸石は、自作の「北海道のスキー民謡」を紹介している。以下の歌詞が綴られており、手稲パラダイスヒュッテ、ヘルヴェチアヒュッテ、空沼ヒュッテ、中山ヒュッテが登場し、スキーと

③「スキー適地と火湯亭」=北海タイムス1931年1月25日付



⑩「春香山の銀嶺荘 土地選定から建設迄」の連載記事＝北海タイムス 1934 年 11 月 18 日～ 20 日付 ▲

▼ ⑪銀嶺荘竣工と開荘、一般開放を伝える記事＝北海タイムス 1934 年 12 月 18 日付



た山小屋とスキー適地をめぐり持論を展開しているのだが、先行してできていた小屋に関して、平地滑走が長く「徒に労多くして痛快味が極めて少ない、今後はスキーイングの火湯亭すなわち往復ともスキー亭楽本位の火湯亭がほしいものだ」として、スキー滑降向きの適地選定の重要さを述べる。その上で「火湯亭は番人を置くに限る」「番人の居ない小屋は忽ち豚小屋同然と化す」として、小屋への管理人(番人)配置を理想とする論を展開している。

さらに呼称について、「小屋の名は判り易く簡単で日本語がいい、ヘルベチアとかパラダイスとかバタ臭くつけないければ小屋の気分が出ぬとは限らぬ」などと書いた。

その 1 年後の 32 年(昭和 7 年)2 月、裸石は北海タイムスに、「大衆スキーヤーに火湯亭を解放せよ」と『スキー火湯亭』の鍵の時代は過ぎた(上・下 2 回)という署名記事を 3 回に分けて書いた(写真⑨)。曰く、「規則づくめで服従させやうとするのはあまりにスキーヤーの気持ちに傷つけ且山小屋を建てた精神にもとる」「山小屋は大衆を無視しては其存在権がないのだから(中略)大衆に向かつて解放せよと絶叫するものである」「大衆スキーヤーの最も頻繁に休泊する小屋には必ず小屋番を常置することだ」「管理の任に当たる者は絶えず監督巡視の必要があらう」「御料地に建てられた火湯亭は個人の専有ではない。速やかに鍵を放棄して大衆スキーヤーの為に喜んで門戸を解放されん事を希望する」。

山小屋は、管理人を配置した上で一般大衆スキーヤーのために広く開放すべきというのが、裸石の持論であったことが分かる。28 年竣工の北海道山岳会の中山ヒュッテに続き、鉄道省・札幌鉄道局が 30 年に奥手稲山に建てた奥手稲山の家にもそのられるものがあつたことが、残された記事からうかがえるわけだが、裸石はそれ以上の快適さと居心地良さを求め、管理人を配置してホスピタリティを重視し、分かりやすい呼称のスキー小屋を脳裏に描いた。そんな思いが結実するのが春香山の銀嶺荘である。

裸石は 1934 年(昭和 9 年)11 月 18、20 日、「春香山の銀嶺荘 土地選定から建設迄」と題した 3 回の署名記事を書いている(写真⑩)。

札幌と小樽の中間に位置する春香山(907 呎)について、「火坊主のグレンデは常にアスピリンのやうな雪を保つて緩急お好み次第のスロープが展開している」とスキー適性が

⑨「大衆スキーヤーに火湯亭を解放せよ」＝北海タイムス 1932 年 2 月 1 日付(右下) ▼
『スキー火湯亭』の鍵の時代は過ぎた＝北海タイムス 1932 年 2 月 16 日付(右上) ▶
▼『スキー火湯亭』の鍵の時代は過ぎた(下)＝北海タイムス 1932 年 2 月 17 日付(左中)





⑰北海道新聞社が再建した新たな 銀嶺荘の完成と一般開放を報じる記事
＝北海道新聞 1960 年 11 月 26 日付

わいぶりも報じられていた(写真18)。

北海道新聞社では、スキー教室、山菜採り、登山会などでも使ったことが社告や記事に残されている。しかし、北海タイムス時代からの初代管理人、本郷学二郎氏(1934(72年勤務、中断期間あり)が病氣療養したことで、管理人不在となり、いったん閉鎖されたのを機に、74年(昭和49年)に東海大に寄贈されるに至った(写真19)。

東海大移譲後も、裸石が描いた一般大衆に広く開放された小屋の伝統は受け継がれ、第2代・田村登志男管理人(1974(87年勤務)、第3代・竹本勝管理人(1988(2008年勤務)、第4代・平田和正管理人(2008(22年勤務)のもと、東海大の学生に限らず多くの一般のスキー愛好者や登山者

れた。学内でのいろいろな議論の末、大学側は最終的に解体を決めて、23年6月に業者によって取り壊され、現在は更地になってしまった。

札幌西部の山々で大正末期に始まった「山小屋の鎖」構想の1つのピースを担った銀嶺荘がなくなり、残ったスキー小屋のピースは8つになつてしまった。多くの一般大衆が関わった山小屋として銀嶺荘はその代表格であり、特異な存在だっただけ

大都市近郊では世界的にも珍しい
スキーツアーのための山小屋群に息
を吹き込み、多くの人々との接点を
つないだ裸石の取り組みを記録とし
て残しておきたく、ペンを執ったこと
を末筆ながら記したい。

建て替え後に東海大に寄贈

銀嶺荘生みの親である裸石は胃がんのため1941年（昭和16年）に亡くなったが、その翌年、「一県一紙」を掲げた国の新聞統合策に伴い、北海タイムスなど道内11新聞は統合して北海道新聞に生まれ変わったことで、北海タイムス社の銀嶺荘は北海道新聞社の銀嶺荘となった。しかし

ながら標高710メートルという立地ゆえ、寒冷と豪雪は木造の小屋の老朽化をいやおう否応なく進行させ、補修を繰り返した末に48年（昭和23年）11月に使用不能に陥つたとされる。北海道新聞社はその4年後、11紙統合の10周年記念事業として山荘の再建を発表し、数年間の準備を経て建設場所を東に約50メートル移動させて60年（昭和35年）12月、元の山小屋よ

り大きい木造3階建てで、スキー置き場、ポーチ、管理人室、炊事室、洗面所、男女別のトイレを併設した、管理人（番人）が常駐する山小屋として新たな銀嶺荘が誕生した（写真17）。

らが利用し、北海道では貴重な管理
人常駐の山小屋として親しまれてき
たことは衆知の事実である。

学外の一 般利用者の宿泊費・休憩
費も破格の安さであり、年間の維持
費を考えると、東海大の経済的負担



春香山本社銀嶺莊

二時開　銀嶺趾より上
 三時開　銀嶺趾より上
 四時開　銀嶺趾より上
 五時開　銀嶺趾より上
 六時開　銀嶺趾より上
 七時開　銀嶺趾より上
 八時開　銀嶺趾より上
 九時開　銀嶺趾より上
 十時開　銀嶺趾より上
 十一時開　銀嶺趾より上
 十二時開　銀嶺趾より上

⑪ 北海タイムス 1934 年 12 月 4 日付

記事では、裸石は「小屋にはコツクが住み込んでゐて一品料理やビール位の需に應じてゐるから可愛がつてほしい」「八釜やかましい規則づくめでなく皆さんのヒュッテとし提供し感じよく親切をモツ

当時、北海タイムス社で編集と事業の両面で中枢に居た裸石にとつて、新聞社として山小屋を持つ経営判断はそれほど難しいことではなかったのだろう。

し、最大(宿泊)収容人数130人で、当時の道内の山小屋としては最大の規模だった。12月18日の紙面では、「春香山に建設した本社銀嶺莊竣工 開荘は二十三日 一般開放は二十五日の朝から」の見出しとともに5枚の写真が掲載され、「銀嶺莊主人 河合稜石」の名が添えられている(写

抜群であることを示した上で、『こんないい山にヒユツテでもあったら』といふ念願は春香山を訪れる人々のひとしく口を衝いて出づる言葉であつた」として、山岳スキーに理解ある人や、最寄りの銭函駅を抱える札幌鉄道局に小屋建設の話を持ち込んで

山8合目、標高710メートル付近を「絶好の場所」と定めて、他の山小屋を参考にあれこれ思案した結果を踏まえて道庁建築課に設計を依頼し、5月に担当者とともに再度現地を訪れて設計図面が出来上がったことを明かしている。

トーとしたい」と述べ、銀嶺莊への思い入れの強さがにじむ。

銀嶺莊と春香山
頂上にスキー神社
標石

ては石垣島の嶺大なる斷崖に、
懸崖にしてながれかき雪を捲て
南岳又西岳の快路に順遊する期待
に衝動がつかつ、スキャーの手入れを
せしり。無敵山を眺め望むのはお
かしらなものである。だが夏とよまれ
ば山の影と雲との脚を敲くことの
美徳は食ひかゝる。

その日、我々は、

ついで龍淵池に辿り
着いた。池のほとりに
ある寺の山門を擧げて
上つてゆくのである。山
の所定で小屋の後方
登山道が狭く、

[illegible]

の滑降ルート、朝里岳や奥手稲山方面へのルート上に指導標を設置したり、訪れる人たちの安全祈願のために春香山山頂に札幌・三吉神社の分

春香山のスキー神社

スキーヤーの心をつとめる春香山の本社社務所は、毎年十二月一日から一陽、今春は既に建立されたスキー神社はスキーヤーの守り神として崇められ、本社では

37年11月18日

ことが紹介されている。こうした取り組み全てが、「銀嶺莊主人」を名乗る裸石のアイデアであることは言うまでもないだろう。

[illegible]

また、小屋で開いた山の座談会がラジオで全国中継されたり、北海タイムス社がハイキングや登山などの主催事業でもたびたび使った。札幌駅―最寄りの銭函駅には、スキー列車「銀嶺号」が運行、リフトやゴンドラがあるスキー場がない時代、天然のスキー場として多くの人が利用、37年（昭和12年）当時の紙面ではスキー客の利用が1シーズン1万人に達したと報じられている。

銀嶺荘に電話開通
(11日)
付市港設の福安通運と、行の感安付タ列参庫（集録赴て）

16北タイ37年1月21日付

⑩北タイ 37年1月21日付

春香山『銀嶺莊』に
電話が架設されました

本報記者の「春香山」に「銀嶺莊」の電話が架設されたことについて、同社社長が「電話が架設されたことは、我々の事業に大いに貢献するものがある。我々の事業は、電話によって、より一層の発展を遂げるものがある。我々の事業は、電話によって、より一層の発展を遂げるものがある。」と述べた。

呼出番號 五十番
二十日
開通

北海タイムス社

⑬北タイ37年1月19日

⑮北タイ 37年1月19日付



⑭北タイ 37年11月18日付



⑬銀嶺荘の東海大への譲渡を伝える記事▶
＝北海道新聞 1974 年 4 月 20 日付

